

長岡市スポーツ推進計画 進捗評価

1 計画概要

計画策定：平成 29 年 3 月

中間見直し：令和 5 年 3 月

計画期間：平成 29 年度から令和 8 年度までの 10 年間

2 基本理念・基本目標

基本理念	市民が自らスポーツを楽しみ健康で生きがいを感じるまちづくり ～スポーツの持つ大きな力をまちづくりに最大限に活かす～
基本目標	目標1 「育てる」スポーツの推進 目標2 「する」スポーツの推進 目標3 「競う（競技）」スポーツの推進 目標4 「支える」スポーツの推進 目標5 「観る」スポーツとスポーツ観光の推進

3 計画の検証について

現行計画が令和 8 年度に最終年度を迎えることから、中間見直しの内容を踏まえて進捗評価を行った。

進捗評価に当たっては、令和 7 年 12 月に実施した市民アンケート結果や関係資料を基に分析を行い、次期計画の検討資料として活用することを想定して課題の洗い出しや今後の方向性を記載した。

基本目標ごとの指標に対する進捗評価指標

評価	内容
A	目標達成（100%以上）
B	概ね達成（80～99%）
C	未達（50～79%）
D	大きく未達（50%未満）

4 総括

(1) 全体評価

本市が実施した市民アンケート調査によると、スポーツ好きやスポーツ実施頻度が高い市民ほど、日常生活に充実感を感じていると回答する市民が多い傾向にある。また、運動やスポーツを行うことについて「好き」「やや好き」と回答した市民は全体の7割以上を占めており、スポーツに対する関心は比較的高い状況にある。

本計画期間を通じて、スポーツに関わりたいと回答する市民の割合が73.3%（H27）から82.0%（R7）に増加しており、市民の多くが主体的にスポーツに関わる意向を持っていることが確認された。

一方で、実際のスポーツ実施状況を見ると、仕事や家事、育児等による時間的制約や疲労感などを理由に、継続的に運動やスポーツを実施できていない層も一定数存在している。

これらの結果から、市民のスポーツへの関心や意欲は高いものの、実施につながる環境や機会の充実が課題となっている。

今後は、少子高齢化の進展、スポーツに対する志向の多様化、中学校部活動の地域展開など、スポーツを取り巻く環境が大きく変化している状況を踏まえて、ライフスタイルに応じた参加しやすいスポーツ機会の提供や、気軽に運動に取り組める環境づくりなどを検討していく必要がある。

(2) 成果が見られる点

- スポーツに関わりたい市民の割合の増加 【成果指標の目標達成】
- 全国大会等に出場する選手数の増加 【成果指標の目標概ね達成】
- 若者に関心の高いスポーツの普及（eスポーツ、アーバンスポーツ）

(3) 次期計画策定時に検討が必要な重点課題

- 運動・スポーツをしない子どもの増加
- 部活動地域展開を契機としたジュニアスポーツ環境の整備
- 年齢、体格、障害の有無に関わらず一緒に楽しめるスポーツの推進
- 働く世代、子育て世代の運動実施率の低迷
- ソフト・ハード両面を考慮したスポーツ施設の適正配置と計画的な整備・改修
- 多様化するスポーツニーズへの施設対応

5 基本目標ごとの進捗評価

目標1「育てる」スポーツの推進

●策定時点でのテーマ

家庭ぐるみ、学校ぐるみ、地域ぐるみでスポーツで子どもたちを育てる

●中間見直し時点での後期期間の方針

令和5年度より、本格的に動き出していく中学校部活動の地域移行を契機に、心身の健康・体力づくりに欠かせないジュニア世代の運動量の確保や、スポーツを「する・しない」の二極化解消に努めるため、時代に応じた新たな活動にも取り組みます。

① 指標の状況

項目		H27 (2015) (基準値)	R3 (2021) (中間目標 値)	R4 (2022) (実績値)	R7 (2025) (現状値)	R8 (2026) (目標値)
運動やスポーツ(学校体育授業を除く)の1週間の実施時間が60分未満の児童生徒の割合	【当市】小5男子	5.3%	5.0%	7.0%	10.2%	5.0%未満
	小5女子	12.3%	8.6%	16.0%	18.5%	10.0%未満
	中2男子	5.9%	5.0%	6.0%	10.3%	5.0%未満
	中2女子	23.4%	14.2%	21.0%	24.4%	15.0%未満
【全国】小5男子	小5男子	6.6%		8.8%	9.8%	
	小5女子	12.9%		14.6%	17.3%	
	中2男子	7.1%		8.1%	9.4%	
	中2女子	20.9%		18.1%	21.3%	

② 評価

- C 未達 (50～79%)
- 体育授業以外で運動やスポーツをしない児童生徒が増加 (全国平均より高い)

③ 要因分析

- 運動やスポーツにおいて「人と比べられることが嫌」 (68.8%)
 - 団体競技で「足を引っ張る不安」 (71.8%)
 - スポーツが苦手な人のうち「運動能力をからかわれる不安」がある (53.4%)
- 以上、R5「小中学生の運動に関する意識調査」(JA 共済連)より抜粋

④ 課題

- 他者との比較や勝敗を重視する風潮・文化からの脱却

⑤ 今後の方向性

- 評価の軸を 記録・順位重視 → 達成感・楽しさ重視へ転換
- 志向に応じたジュニアスポーツクラブ (Come100 クラブ) などの整備検討

目標2「する」スポーツの推進

●策定時点でのテーマ

市民がスポーツを通じて豊かな人生を実現する

●中間見直し時点での後期期間の方針

運動やスポーツを行う市民の割合は増加傾向にあり、運動・スポーツを「しない」割合も減少しています。今後も、性別や年代、障害の有無にとらわれずに、誰もがスポーツを楽しめる環境づくりに取り組みます。

① 指標

項目	H27 (2015) (基準値)	R3 (2021) (中間目標値)	R4 (2022) (実績値)	R7 (2025) (現状値)	R8 (2026) (目標値)
週1回以上、運動やスポーツを行う市民の割合 (18歳以上)	43.7%	55.0%	56.6%	34.3%	65.0%

② 評価

- ・ C 未達(50～79%)
- ・ 20歳代～50歳代の週1回運動実施率が30%未満で他の年代より低い。

③ 要因分析

- ・ 運動やスポーツを月1回以上行っていない理由上位は、「仕事の忙しさ(41.6%)」、「面倒だから(25.6%)」、「家事が忙しいから(18.9%)」。
スポーツに参加しにくい理由として「仕事で疲れるため体を休めたい・運動する気にならない」「子どもを置いて外出できない」の回答が多い。
- ・ 仕事の疲労による意欲低下
- ・ 子どもの見守りが必要で運動・スポーツのために外出できない
- ・ スポーツ＝競技スポーツというイメージがあり、気重なイメージ

④ 課題

- ・ 疲れて体を休めたいという「やる気以前」の状態への対応不足
- ・ 託児や子どもの見守りなどの支援
- ・ 気晴らしやリフレッシュ、楽しむことを目的としたスポーツの促進
- ・ 運動の得手・不得手や、年齢、体格、障害の有無に関わらず楽しめるスポーツの推進

⑤ 今後の方向性

- ・ 疲労回復型プログラムの検討
- ・ 託児サービスをつけたスポーツイベントや運動教室等の実施
- ・ 親子・家族で楽しめる運動・スポーツ機会の提供
- ・ 年齢、体格、障害の有無等に関わらず楽しめるユニバーサルスポーツの推進
- ・ 気晴らしを目的とした散歩などもスポーツに含まれることの啓発強化

目標3「競う（競技）」スポーツの推進

●策定時点でのテーマ

地元選手が世界や全国で活躍し、市民に夢と感動を与える

●中間見直し時点での後期期間の方針

競技力向上を目指す選手に対し、幼少期から高校生期までの普及育成強化といった一環指導体制を構築するとともに、年齢、性別、障害の有無に関わらずトップアスリートを目指す競技者にとっても継続的なサポートにつながる環境整備を進めていきます。

① 指標

項目	H27 (2015) (基準値)	R3 (2021) (中間目標値)	R4 (2022) (実績値)	R7 (2025) (現状値)	R8 (2026) (目標値)
全国大会、世界大会の出 場選手数（年間延べ人 数）	788 人	876 人	610 人 (平均 373 人)	928 人	950 人

② 評価

- B 概ね達成（80～99%）
- 全国大会等への出場者が増加傾向にある

③ 要因分析

- 市スポ協の高校部活への医科学サポート事業（助成金、トレーナー紹介）の成果
- 市スポ協のジュニア選手育成強化事業の取り組み成果

④ 課題

- 安定的な財源確保
- 才能ある選手の発掘・育成システムの構築
- 長岡市を拠点に活動できる体制の整備（優秀選手等の市外流出防止）

⑤ 今後の方向性

- 種目を絞ってトップアスリートを育成する仕組みの検討
- 地元企業とのマッチング方策やスポンサー獲得方策の検討

目標 4「支える」スポーツの推進

●策定時点でのテーマ

市民が身近な場所でスポーツを楽しみ、スポーツを支える

●中間見直し時点での後期期間の方針

市民の心身の健康、体力づくりにつながるスポーツ環境を目指して、ソフト及びハード両面から支える体制づくりを強化します。

① 指標

項目	H27 (2015) (基準値)	R3 (2021) (中間目標値)	R4 (2022) (実績値)	R7 (2025) (現状値)	R8 (2026) (目標値)
日本スポーツ協会公認 スポーツリーダー資格 取得者 1 人あたりの人 口※人口÷資格取得者 数	1 人あたり 550 人 (資 格者 503 人)	1 人あたり 500 人 (資 格者 550 人)	1 人あたり 828 人 (資 格者 315 人)	1 人あたり 1,247 人 (資格者 202 人)	1 人あたり 800 人 (資 格者 300 人)

② 評価

- C 未達 (50～79%)
- 日本スポーツ協会公認スポーツリーダー（スポーツ少年団指導者）が減少傾向

③ 要因分析

- スポーツ少年団の団員数・団数の減少に伴う指導者の減
団員数・団数の減は、少子化の影響以外に楽しみたい志向とのミスマッチも影響
- コンプライアンス意識、安全責任、志向の多様化などにより負担感が増加

④ 課題

- 多様な志向に対応した指導者の育成
- Come100 クラブ等の指導者・サポーターの安定確保
- スポーツ推進団体※の役割共有
※市スポーツ協会、スポーツ推進委員、総合型地域 SC、地区スポーツ協会、コミュニティ協議会のスポーツ部会等、スポーツ少年団、Come100 クラブ等
- スポーツの多種目化や多様な利用者ニーズへの施設の対応
- スポーツ施設の老朽化に伴う大規模改修等による経費増大
- スポーツボランティアなど「支える」スポーツの選択肢や機会の提供

⑤ 今後の方向性

- 「参加継続型（＝やめさせない指導）」に軸足を置いた指導者育成の検討
- スポーツ推進団体における地域スポーツビジョンの共有と役割分担
- ソフトとハードの両面を考慮したスポーツ施設の適正配置と計画的な整備・改修
- 施設のネーミングライツ活用などによる財源の確保
- スポーツボランティアの運営を担う組織や仕組みづくりの検討

目標 5「観る」スポーツとスポーツ観光の推進

●策定時点でのテーマ

市民がスポーツの多様な楽しみ方にふれる

●中間見直し時点での後期期間の方針

多世代にわたる市民がスポーツに関わりたいと感じていることから、今後も継続的に、スポーツの価値を市民へ発信していくことが重要です。

運動・スポーツに『関わっていない』層への機会を創出していくため、「する」だけでなく「支える」「観る」を含め、スポーツに関わることで得られる「楽しさ」「喜び」を伝えていきます。

① 指標

項目	H27 (2015) (基準値)	R3 (2021) (中間目標値)	R4 (2022) (実績値)	R7 (2025) (現状値)	R8 (2026) (目標値)
スポーツに関わりたい と回答する市民の割合 (18歳以上)	73.3%	78.0%	80.0%	82.0%	82.0%

② 評価

- ・ A 目標達成 (100%以上)
- ・ スポーツに関わりたい市民の割合が増加傾向

③ 要因分析

- ・ R4 アンケート比で「家族等の運動・スポーツの応援・サポート」(約10%増)、「自分でする運動やスポーツ」(約8%増)、「プロスポーツ等の観戦」(約5%増)
家族等を「支える」関わり方への増加率最も大きく、「する」「観る」の関わり方も増加

④ 課題

- ・ 「関わりたい」から「関わる」への行動変容
- ・ 1年間で県内プロスポーツチームの試合をTV等含め観戦していない人 約62%
- ・ 1年間で「運動やスポーツを支える活動」を行っていない人 約80%
- ・ スポーツを通じた交流人口の拡大(スポーツツーリズム)

⑤ 今後の方向性

- ・ 県内プロスポーツチーム・選手と連携した地域活性化策の検討
- ・ 県内プロスポーツチームの観戦機会の拡大
- ・ 「支える」関わり方の認知度向上・選択肢の増加
- ・ 地域資源を生かしたスポーツツーリズム方策の検討